

か又舌編より出づるといふ。
如何んな事を根柢として右の様な事を申したのか
解りませんがいつれ善くないといふ事は學ばず己
に身につける悪しき癖は一日も早くなほさなければ
ばなりません。殊に物摸擬たがる幼児等をお取り
扱ひにならるゝ方々は少しの癖もかなほしになり
ませんと子供等は何等の間にか同形の癖のつくも
の右おもしろいと思ひましたから一寸受け賣りい
たします。

幼児笑話

五つと五才 赤坂 貞子
お向ふの八重子ちゃん 今年取つて五つの可愛盛り或日遊びに來
られたので「八重ちゃんあなたのおいくつ？」と聞きましたら、圓い
目を見張つて「あたし五つと五才ま」

おんぶして淺草へ 相摸 杉村
「長ちゃん大きくなつたらだれをお嫁さんにするの」と五つの真さ
んに聞きましたら
僕春姉さんをお嫁に貰ふの」といひますので「それぢやお嫁さん
にしてどうするの」と又聞きましたら
「僕おんぶして淺草へ行くの」

僕の拙い處 岡山 吉岡 絹子
五つなる弟の清が「背中がかいから母さん早く拙いて」と云つて
母にかいて貰ひながら「母さんもつと上よもつと下よ」と云つて居
ましたがやがてじれたそうちに「母さんには僕の拙い處分らない
のかな」

短歌

つゝましげに物言ふ人の袖ふきて紅梅かほる朝の露かな
ほのやかに瑞色なせるしのめやいろくきこひ初鐘の聲
鐘の音は花の匂ひをそとゆきて若草山にゆふかすむかな
雪の日や眼をやむ人をいたはりて共にきこひつる鶯の聲
春若きみどりは雪の白妙にのときわ目だつ 朝倉 美知
戀やれし夕べふと見し白梅の光りのまいに冷たく句はむ
なき罪をまゝ母に得て忍び音に泣くにも似たり 小野 春香
琴の音に句ひたやよう梅の欄あや羽うちふる 吼雀 鳩かな
臘を涙とふたりそゝる行く花の下かぜ身に 瀧 渡る 琴
波の上を白魚をとる琴の手に銀燭ゆるゝ春風の宵 金 陵 子
薄ぐらも花の下かけ笛とりて吹くとしも無くさまよひし夜や
友をすてはらからを捨てなまじに世を咒ふべき都ぶり哉
朧月木かげに人のかけふたつきえたる跡を花吹雪する 櫻井 彌生
脊におへる稚兒のさしづにたとり行く世の道狭き我さだめ哉
世はなへて毒霧せまる立山のわめき聞ゆる地獄谷かも ちとせ 女
臆たけし尼君そゝる經とちてうなだれ勝ちに驚をさく
柔かき若草の野をさまよへるふりわけ髪にふく鶯の風 * * * * *
記 雲
亡き人の宿世かなしむ春の日を
鐘とよみ鳴る花くもり哉
鳳凰堂朝日うらゝすき彫りの
天女に句ふうこん櫻や
(投稿隨意) 伊勢白子局區内 眞宮 宛